

研究結果

研究テーマ：『日本の隠居制度における儒教倫理の弱化』

本研究は日本の隠居制度と儒教倫理が適応的關係ではないと設定している。儒教倫理は隠居制家族において中国におけるそれと同じく家の内部行動規範としていないと考えるからである。儒教倫理の中核をなす孝と悌は親に絶対服従することと、兄弟の関係を睦まじくすることである。家長権の親から子への生前移譲は家長の「任期制」を意味し、それは「終身制」とも言える中国の家長の至上の権威を損ない、ほかの兄弟に対する排他的な長子相続法は悌の思想と矛盾するものと考えられる。そもそも中国の儒教経典は五世紀に日本に伝わり、その変遷の歴史を紐解くと、日本に与えた影響は決して弱いとは言えない。特に近世には幕府が儒教を治国の根本とし、近代には儒教の教化に基づいた学校教育が強化された。階層的に格差があるものの、日本ではかなり儒教倫理が浸透したと考えられる。にもかかわらず、儒教倫理は隠居制家族の行動規範となっていないのは、隠居には制度的にそれを維持するメカニズムがあると考えられる。家長権の継承についていえば、隠居制度には新しい家長の育成、家長選びの「優勝劣敗」、家長権を抑制し、専制主義を克服するメカニズムがあると認められよう。そして、隠居分家、分住隠居などの形式の隠居には子の成長に伴う新しい独立世帯を形成する意味で、新しい家或いは家業を作るという「創業志向」が認められる。血筋を絶対視しない系譜の継承は系譜の永続を図る家の発展の戦略で、家業を経営する「能力重視」志向の現れである。明らかに隠居制家族は全部儒教倫理を規範としない異質なものである。儒教に束縛された中国の家は家長の「終身制」や均分相続などの制限でだんだん活力を失い、衰退する方向に働くが、隠居制家族は家長の交替によって家の活力が維持され、「創業志向」と「能力重視」志向には近代性が認められる。このような違いは、儒教倫理は日本社会の基本的な構造が確立した後の部分的受容、そしてその中の「実利主義」重視によるものと考えられる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名：『日本的隐居制度与家长权的传承』（日本の隠居制度と家長権の継承について）

発表者名：江 新興

掲載誌：『日语学习与研究』（日本語学習と研究）2009年第4期

掲載時期：2009年8月

題名：『日本的隐居制度与儒家伦理』（日本の隠居制度と儒教倫理について）

発表者名：江 新興

掲載誌：『北京第二外国语学院学报』（北京第二外国語学院学報）2009年第8期

掲載時期：2009年8月

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)